

# 地方学生アメリカンフットボールリーグにおけるデータフィードバックを用いた講習会が外傷発生動向に与える影響の検討

所属：大学院博士後期課程  
氏名：梅崎泰侑

## I. 研究概要

本研究は、予算やサポートスタッフが限られる地方大学アメリカンフットボールリーグにおいて、自分たちの過去のケガのデータを講習会でフィードバックすることが、選手やスタッフの安全意識の向上やケガの発生にどう影響するかを検証することを目的に実施しました。講習会后、選手やスタッフの安全意識が向上しました。試合では、1試合あたりのケガの総数は変わりませんでした。筋けいれんの割合が減少（37.2%→7.7%）した一方で、頭部のケガの割合は増加（6.2%→15.4%）しました（図1）。データを共有したことで、水分補給などすぐに取り組める対策への意識が高まり、筋けいれんの減少につながった可能性があります。頭部のケガの割合が増えたのは、座学だけではプレー技術が改善せず危険な接触が増えた可能性と、安全意識が高まり軽い衝撃でもしっかり報告されるようになった可能性の両方が考えられます。過去データの共有は安全対策の有効な第一歩となりますが、複雑なケガを防ぐには座学だけでなく実践的な練習も組み合わせる必要があると考えます。

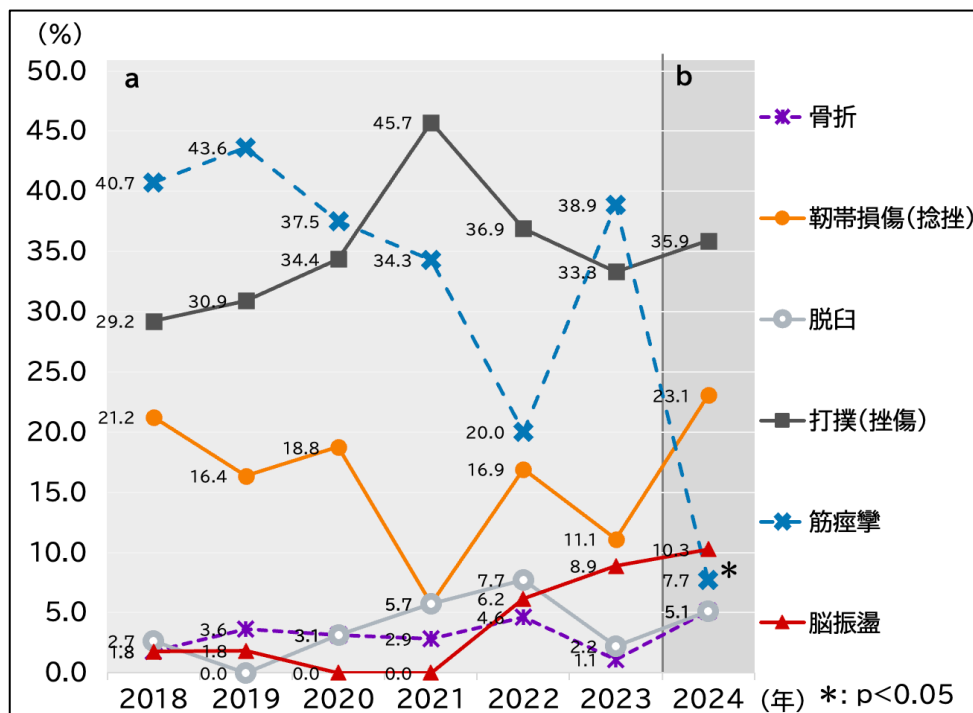


図1 外傷分類の経時的推移

講習会前の2018-2023年を「期間a」、講習会後の2024年を「期間b」として示している。

## 【用語説明】

( \* 1 ) **筋けいれん** : 本研究では、こむら返りとして定義しています。筋肉が自分の意思とは関係なく強く縮んでしまい、痛みを伴う状態です。

( \* 2 ) **脳振盪 (のうしんとう)** : 頭や体に強い衝撃を受けることで脳が揺さぶられ、一時的に脳の機能が低下するケガです。アメフトのような激しい接触を伴うスポーツでは特に重大な事故につながる恐れがあるため、講習会などでも正しい知識と予防、そして発生時に隠さず報告することが非常に重要視されています。

## II. 今後の展開

過去データの共有は安全対策の有効な第一歩です。今後は座学に加え、安全なプレー技術を学ぶ実践的な練習を組み合わせる必要があります。さらに、各チームへのインタビュー調査でそれぞれの課題や安全文化を深掘りし、現場に合ったより効果的なケガ予防策の開発を目指します。

## III. 論文情報

雑誌名 : Frontiers in Sports and Active Living

論文タイトル : Exploring the impact of a data-feedback workshop on injury trends in a regional collegiate American football league in Japan

著者 : 梅崎泰侑<sup>1)</sup>, 遠藤康裕<sup>2)</sup>, 田口直樹<sup>3)</sup>, 漆畑俊哉<sup>1)</sup>, 片岡洋樹<sup>4)</sup>, 平塚光成<sup>5)</sup>, 加藤 洋<sup>6)</sup>, 赤井畑諄<sup>6)</sup>, 前田慶明<sup>7)</sup>, 篠原 博<sup>1)</sup> \*

- 1) 青森県立保健大学大学院
- 2) 福島県立医科大学
- 3) 仙台大学
- 4) 仙台医健・スポーツ専門学校
- 5) M&メディカルリハ株式会社
- 6) 東北学生アメリカフットボール連盟
- 7) 早稲田大学

DOI : <https://doi.org/10.3389/fspor.2026.1746737>

**Key Words** ①大学アメリカンフットボール ②データフィードバック ③教育的介入  
④外傷予防 ⑤東北地方

## IV. お問い合わせ先

青森県立保健大学 キャリア開発・研究推進課 事務担当

E-Mail : kyariken@ms.auhw.ac.jp

TEL : 017-765-4085